事務局 amateur スタッフによる **フォロー・アップ メモ・ランダム**

「あおや ものがたり」

デデは木工製品を作る職人の一人だが、今はしかたなく農具作りを手伝っている。新たな水田を耕作するのに必要な農具が喫緊の課題だからだ。勝部川や日置川の上流を切り開けば水田を広げることはできる。成人に達した若い労働力に加えてムラに流入した者たちも即戦力だが、肝心の農具が足りていないのだ。事の重大さは理解していても、木工製作に比べてあまりに雑な作業にモチベーションが上がらないでいるのだ。それでも気を取り直そうとしていると、そこにコマ爺が現れた。コマ爺こそあおやムラの木工製品を芸術の域にまで高めた張本人であり、デデやあおやムラ生まれの職人たちの師匠なのである。

最近のあおやムラは玉づくりをしていた頃より水田も広くなっているが、それでも足りないほど人口が増えている。長老の話しでは昔は食糧が不十分で、生まれた子の半分も大人になれなかったそうだ。周辺のムラは今でもそうで、食糧不足で廃れてしまい、そんなムラからも人々があおやムラに流入してくるので、あおやムラは益々人口が増えていく。あおやムラが栄えるのは、西にあるムラやクニの首長たちが欲しがる秀麗な木工製品を、あおやムラの職人たちが作り出すからだった。

昔 あおやムラは越から碧玉を分けてもらい、玉に磨いて綺麗な首飾りなどを作っていたらしい。時々西の海から鉄を携えた人々がやってきて、首飾りなどと交換していったので、その鉄を加工して鍬先などの農具として使っていた。しかし、越から碧玉がめっきり減ってしまったために西から来る船もなくなりかけていた。ちょうどそんな頃に、コマ爺たちがやってきて、そして大きな事件が起こってしまったのだ。

青谷上寺地遺跡
第17次調査の管玉

～.～.～.～.～.～.～.～.～.～.～～.～.～.～.～.～.～

安彦良和著 『神武』より

コマ爺の話しによると釜山を出るときは対馬に向けての船出だった。対馬海流はときおり蛇行し、その方向や速さを予想することは難しい。コマ爺が乗船した頭目の船と他2艘が東に流され、残りの船団がそれを追ったのが失敗だった。船が合流すると間もなく大嵐が船団を襲った。二昼夜にも及んだ風雨を乗り切ったときには、船団は半分の数しか視界になかったそうだ。空が晴れたら、南西の果てに山頂らしき姿が見えたが、船を操るための櫂はなく、潮に流されるばかりだった。このとき見えた山頂が大山であり、大山山頂が渡海の際のランドマークであることも知っていたが、どうしようもなかった。ついに山頂は視界から消え、東に陸の尖端らしき岩陰がかすかに見えてきた。船団に残っていた何本かの櫂を一番小振りの船に集めて、陸上のムラに助けを求めに向かった。

コマたちがあおやの浜に現れたときムラ人は総出でこれを打ち払おうとしたが、マレビトの若き頭目は僅かな従者を従えて助けを請いに進み出た。あおやのオサは若者の勇気を讃えて船団を受け入れた。彼らを一所に集めて水を与え、食事を与えるうちに元気を取り戻す人たちが出てくる一方で、頭目の母親と思しき女性は季節が変わっても起き上がることができなかった。船旅の疲れというより、深刻な病を負っているようだった。

海から来た者の中には鉄の道具で木材に彫刻をする職人がいて、コマの父親もその一人だった。あおやムラの何人かの男達(その中にはデデの父親もいた)は、彼らにその道具の作り方や、使い方、それに彫刻の仕方を熱心に教わっていた。まだ少年だったコマもムラの男らに混じって、自分の父親からいろんな技術を習ったと言う。

半年を過ぎる頃から咳をして食事を取らなくなる者が現れだした。彼らは、上陸以来寝たきりで周囲から献身的な介護を受けている女性と、同じ咳をしているのがムラ全体を不安にした。そしてついに、咳をする者が何人か亡くなり、女性が血を吐いていると噂されるようになるとムラ中はパニックになった。ムラの男たちは武器を手に海を渡って来た者たちに襲いかかり皆殺しにしてしまった。デデの父親がムラオサの指示で職人の何人かを匿ったが、彼らはその後ずっとムラから隔離されることになった。デデの父親らは隔離後も格子越しに技術を教わったが、格子の中のコマが一番多くを学び、生き残りの最後の人となったのだ。

安彦良和著 『神武』より

～.～.～.～.～.～.～.～.～.～.～～.～.～.～.～.～.～

コマ爺は、しばらくして一本の農具を仕上げると、肩の部分に飾り細工を施しだした。そのあまりの出来の良さに、誰がこの農具を使うのだろうと、デデは可笑しくなったが、コマ爺は一向に気にするふうもなく小屋をでていってしまった。

※ 古代史(弥生時代～飛鳥時代)に疑問をお持ちの方、疑問・質問・反論 大募集 (体裁は自由ですが、文書でお願いします)